

牧雲通門の著述について

野 口 善 敬

中国明代末期の臨濟宗を代表する禅僧に密雲円悟（一五六六―一六四二）がいるが、彼の十二人の法嗣の中で、日本にその著述が一番数多く残されているのは費隱通容（一五九三―一六六一）である。彼には四種類の語録の他、『費隱禅師別集』十八卷、『五燈嚴統』二十五卷、『禅宗漁樵集』一卷などが現存しているが（拙稿「明末清代仏教の語録・著述とその法系」〔広島大学『東洋古典学研究』第一〇集〕三七頁―三八頁参照）、その最大の要因は、彼の弟子である隠元隆琦（一五九二―一六七三）が日本に渡り、「臨濟正宗」の旗印の下、黄檗派（後の黄檗宗）としてその一門が盛行したという日本独自の事情に拠るものであり、必ずしも費隱が密雲の下で中国清初期に最も突出した存在であったことを示すものではない。ただ、もとより費隱は密雲の棒喝禅の禅風をそのまま引き継いだ中心的存在であるし、彼の著述は語録を中心にしたものであって、「經典から一字も援用したことがないし、まして「儒教などの」外典はいうまでもない（未嘗輒援契經隻字、況於外典）」（唐世濟撰「金粟費大師語録序」と評された様に、教禅一致や儒仏一致とは一線を画した純禅指向であった。その意味で禅門の師家としての本分を守った存在であったと言えよう。これに対して、密雲の法嗣の中で、外典にも通じ、詩文にも秀でており、その方面の著述を豊富に残した人物が二人いる。

一人は順治帝から弘覺禪師の号を下賜された木陳道忞（一五九六―一六七四）であり、彼には二十卷本の語録以外に、外集として『布水台集』三十二卷、『百城集』三十卷、『北遊集』六卷、『西巖隱集』存五卷（卷三―卷七）が現存し、その他、『雲僑集』二十五卷、『禪餘「集」』、『停梅集』が有ったとされる（拙稿「關於木陳道忞の著述」〔台北正中書局『東亞文化的探索——傳統文化的發展』・一九九六〕を参照）。

そして今一人が、木陳の法弟に当たる牧雲通門（一五九九―一六七二）である。現存する彼の著述は、語録と別集を合わせて八種類がある。以下、その八種類について紹介し、明末清初期の禪宗史研究の一助としたい。

【語 録】

① 『牧雲和尚語録』二〇卷・四冊 姑蘇西華山秀峰寺門人行瑋等編

牧雲の正規の語録はこの一種類しか現存していない。駒澤大学図書館所蔵の嘉興藏經の統蔵第七十帙の第六冊（九冊に相当し）〔藏版経直画一目録〕・327aでは「第七十六函」所収とする）、駒大以外に久留米梅林寺などに所蔵されているが、台湾で影印刊行されている『嘉興大藏經（もとは『中華大藏經』）』（台湾・新文豊出版公司、影印）では欠落している。編纂者として名前が挙げられている岫雲行瑋（一六一〇―一六七六）は、牧雲の法嗣として『五燈全書』卷七六に名前が挙げられた四十七人の筆頭の人物である（NINE・285c）。巻頭に順治六年の進士である構李（浙江省嘉興県）の王庭（言遠・一六〇七―一六九三）の「序」が付けられている。「序」には撰年の記載が無く、また語録の巻末に刊記が全く無いため、刊行年次は不明である。「序」の中に、「師（＝牧雲）は密雲老人から印可を受けてから、先ず梅里の古南に住持し、繼いで興福・棲真・天童・興化に〔住持として〕居し、鶴林に退隱した。その各所での開堂〔の説示や〕、入

室問答の言葉や、「偈」頌については、それぞれ個別の刻本があるが、ここにまた繁雜〔な部分〕を取り除き、校訂して十六卷として残し、楞嚴寺の經坊で流通させるものである（師印心於密老人、先住梅里之古南、繼居興福・棲真・天童・興化、退隱鶴林。所在開堂入室問答話頌、各有專刻。茲復芟繁訂存十六卷、流通于楞嚴之經坊）〔二〇〕とあり、もともと十六卷本の語録が刊刻された折の「序」であつたことが知られる。十六卷本の語録は嘉興藏の中に現存していない。序文として、今一つ朱一是の序も付されているが、これについては②で言及する。

内容の目次は次の通りである。

序（樵李王庭言遠題）

序（欠庵居士朱一是法名恒晦撰）

目録

卷一 住嘉興古南禪院語録

卷二 明州高悟山棲真禪寺語録・嘉興梅谿禪院語録

卷三 虞山興福禪寺語録

卷四 再住虞山興福禪寺語録

卷五 興化極樂禪院語録・鎮江鶴林禪寺語録

卷六 寧波府天童山景德禪寺語録

卷七 小參 卷八 示衆上 卷九 示衆下・晚參 卷十 普說・對機・垂代

卷十一 陞座上 卷十二 陞座下 卷十三 小參之餘 卷十四 晚話・法語

卷十五 拈古上 卷十六 拈古下 卷十七 頌古上 卷十八 頌古中

卷十九 頌古下 卷二十 行実

卷二十の「行実」は崇禎十三年冬、古南に出世開法した後、大衆から請われて述べた自説の行実である。十三丁にわたり、出世に至るまでの牧雲の参歴が詳細に綴られている。

② 『牧雲和尚七会餘録』六卷 姑蘇西華山秀峰寺門人行璋等編

語録ではあるが、「餘録」とある様に一般の体裁とは異なり、「天童上堂」が「書」や「答語」の後に入られている。駒大や梅林寺の嘉興蔵には存在せず、『蔵版経直画一目録』にもその名前が見えないが、『中華大蔵経首編』（修訂中華大蔵経会・民国五七年）に拠れば、「統第七十三函」所収とする。ただ、版心の様式が一般の嘉興蔵本とは違い、中央より右半分に書名・巻数・丁数が全て記載されており、版心上部の「支那撰述」の文字も刻まれていない。『嬾斎別集』などと似た版式である。台湾版『嘉興大蔵経』第一二六冊（新文豊出版公司、また台湾版『中華大蔵経』第一〇三冊）に収載されているが、序文を欠く。但し、前述の様に①には巻頭の王庭「序」に続けて、崇禎十五年の孝廉である朱一是（近修・生卒年未詳）の「序」が載せられているが、この一丁半の「序」は、版心に「牧雲和尚七会餘録序」とあり、内容からも『七会餘録』の序文であることが確認できる。本来この序文が巻頭に付されていたものであろう。

③ 『牧雲和尚宗本投機頌』一卷 記室智峯 侍者超慧 全対

単著であり語録ではないが、内容的には語録に収載される性格の文章である。『嘉興大蔵経』第三一冊（また『中華大蔵経』第一二四冊）に影印が収載されているが、これは「嘉興又統蔵」第四函に蔵外から「増入」されたものである。対校者のうち、記室（書記）の智峯は牧雲の法嗣である与麼智時（生卒年未

詳)のことであろう。『五燈全書』巻七六(7141・294b)等に伝がある。侍者の超慧については、法嗣の中にその名前が見えない。本の内容は、西天における釈尊から第二十七祖般若多羅尊者、および東土における初祖達磨大師から臨濟第三十世密雲円悟に至る、全六十八代の祖師方の投機因縁に対する頌古である。版式は②に類似している。序もなく刊記なども無い。

④ 『牧雲和尚病游游刃』一卷 記室智肯重編 侍者超慧対閱

『法華経』や『十牛図』などに対する頌偈集であり、内容的には③同様、語録に収載されるべき内容の文章である。③と共に『嘉興大蔵経』第三一冊(『中華大蔵経』第一二四冊)に影印収載されており、版式も③と同じで、序や刊記は無い。

【詩文集】

⑤ 『病游草』二巻 東呉毛晋子晋編閱 鄂州記室智時校訂

③④と共に『嘉興大蔵経』第三一冊(『中華大蔵経』第一二四冊)の「嘉興又統蔵」第四函に影印増入されているが、もともと毛晋の汲古閣本である。版式は③や④と同様であるが、『初草』の第一丁の版心、及び『後草』の第一丁・最終丁の版心には「汲古閣」という文字が刷られており、汲古閣本であることを明示している。③④には「汲古閣」の文字は無いが、版式から見て同じ汲古閣本であった可能性が大きい。巻頭に崇禎十三年(一六四〇)庚辰五月の「自叙」があり、その序文の版心には「病游草序」と刻まれており、二巻がセットで刊行されたものと思われる。ただ、上巻・下巻と明記されているわけではなく、上巻に相当する部分が『病游初草』、下巻に相当する部分が『病游後草』と題されており、もともと別行さ

れていたものを崇禎十三年、つまり古南に出世した時点で合刻したものであろう。

刊記は無いが、『初草』の末尾にある「重過頂山寺」の序文には「己丑（順治六年・一六四九）春（三七）の記載がある。よって、この詩は当然、自叙が書かれた崇禎十三年以後の作品ということになり、当初『初草』が完成してから後に付加されたものと思われる。よって、現存するこの本の刊行は、少なくともその順治六年より後のこととなる。

編閲者の毛晋（一五九九〜一六五九）は、もとの名を鳳苞、字を子九と言ったが、後に名を晋、字を子晋と改めた。江蘇省常熟県の人で、数万巻の蔵書家として名高く、汲古閣を構築して、ここに名士を招いて「古書の校勘を行い、『十三經』や『十七史』など、多数の典籍を刻行して流布させたことで知られる。子晋と牧雲との間に親交が有ったことは、⑥『別集』巻四の「復毛子晋檀越啓」（232）や⑦『後集』巻四の「毛子晋六十、作隱湖歌為壽」（233）などによって知られる。その伝は『清史列伝』巻七一（中華書局校点本・p.5791）などに見える。校訂者の智時は③に既出。鄂州（湖北省武昌県）は智時の出身地である。

「病游」という語は④にも見えているが、「自叙」に拠れば、この語には二重の意味が込められている。一つには「病」とは「生死之大病」を指し、その病源をつまびらかにしようとして十餘年の間、参究遍歴したから「病游」と名づけたのであり、今一つには、牧雲自身が十餘年の間、実際に病を患い、「毎に病を抱えて游んだ（每抱病而游）」からだと言う。牧雲の罹患については、「行実」に「二年間、傷寒^{熱病}になった（兩年傷寒）」、『牧雲禪師語録』巻二〇・10b）とか、「脾泄^{下痢}に染^{かか}つたまま二年がすぎた（染脾泄、経及両載）」（二a）といった記述があり、「傷寒（熱病）」や「脾病（下痢）」に苦しんでいたことが知られる。

内容は両巻ともに詩偈集であるが、『病游初草』は天啓五年（一六二五）壬戌の年号を記した「壬戌歲習禪破山寺作十首」が巻頭に置かれ、「己巳（崇禎二年・一六二九）除夕病中」（10b）、「癸酉（崇禎六年）除

夕」(30b)、「丙子(崇禎九年)秋寓餘杭山」(45c)など年次順に並べられており、「庚辰(崇禎十三年)夏重登維摩金粟堂」(59c)まで、つまり原則として「自叙」が書かれる直前までの十五年間の詩偈を纏めたものである。(ただ、前述の様に順治六年の作品が付加されている。)『後集』は巻頭の題目の下に細字で「天童」と書かれているが、「乙亥(崇禎八年)冬入山」(3a)、「己卯(崇禎十二年)初夏送友人帰閩」(11b)など、「初草」同様、修行時代に天童で作った詩偈を集めたものである。

⑥ 『牧雲和尚嬾斎別集』十四卷 東吳毛晋子晋編閱 鄂州記室智時較訂

『嘉興大藏經』第三二冊(『中華大藏經』第一二三冊)の「嘉興又統藏」第四函に「増入」されているが、⑤同様、毛晋の汲古閣本である。版式は、②と⑤と同じく、版心の右側に巻数・丁数などが刻まれており、⑤と同様、各巻の第一丁と最終丁の版心は、巻数を記載せずに「汲古閣」と明記されている。巻頭に王庭と朱一是の「序」が付録されており、文七巻・偈一卷・詩六巻からなる詩文集である。その影印は『嘉興大藏經』以外に、『禪門逸書初編』第九冊(台湾・明文書局)にも収載されており、現在、容易に見ることが出来る。刊記がなく、序文にも年次の記載がないため、刊行年次は分からない。

詩六巻の表題に拠れば、銅井・古南・棲真・興福・興化・鶴林・天童の時期のものを集めた詩文集である。銅井とは、崇禎十一年戊寅(一六三八)春から翌春にかけて、牧雲が岫雲行璋(一六一〇～一六七六、後に牧雲に嗣法)らと共に住していた安徽省の銅井山のことであり(『牧雲和尚語録』卷二〇・行実・12b-13a)、古南に出世する直前の銅井山の時代から、天童を謝事する順治十一年甲午(一六五四)秋までの牧雲の詩文を集めたものである。ただ、実質的には翌順治十二年春までの詩を含んでいるから、順治十二年以降の刊刻であることは間違いない。詩偈の部分については⑤の続編とも呼ぶべきものであろう。

影印本が存するので目次は省略する。

⑦ 『牧雲癡翁後集』 六卷 門人果得編次

北京図書館所蔵の孤本である。半丁九行、毎行十八字の版本であり、嘉興藏本や汲古閣本など他の①～⑧が半丁十行、毎行二十字であるのと形式を異にしている。完本ではなく、卷六の「雑詩」部分の第二十六丁までで、第二十七丁以降が欠けている。巻頭に序文は無く、「目録」に拠れば、巻末に「序」が有ったらしいが、欠丁のため残存していない。刊記も無い。

編輯した門人の果得は、牧雲の法嗣で後に西資寺に住した慈開果得（生卒年未詳）のことである。その伝は『五燈全書』卷七六（Z141・294c）に見える。

本書の内容は次の通りである。

卷一 示衆 機縁 像賛 式古論 復大梅幟姪四書

卷二 書問五十八通

卷三 与友論出世書

卷四 雜詩一百八首

卷五 統五燈三難論 別集中式論

卷六 五論 雜詩 附序

内容から言えば、卷一の示衆や機縁などは明らかに【語録】の部類に含まれるものであるから、この『後集』は「語録」として扱うべきものであるかも知れない。卷一の巻頭の条に、「順治十一年甲午の冬、師は……天童より潤州（江蘇省鎮江県）に還り、鶴林に掩室とじむり、毎日、『華嚴經』を諷とよめるのを日課として

いた。檀越たちは懸命に法要を請うたが、偈を説いて謝った（甲午冬、師……自天童還潤、掩室鶴林、日諷華嚴為課。檀護堅請法要、乃說偈謝）（二七）とあり、次の条が「丙申（順治十三年）九月、師、嘉禾（浙江省嘉興県）より山に還りての示衆（丙申九月師從嘉禾還山示衆）（二八）となつてゐるから、明らかに①に載せられていない天童を退山して以後の語録である。しかし、巻四の「雜詩」は【詩文集】に属するし、その詩は「乙未（順治十二年）冬、俗兄遽に歿す……（乙未冬俗兄遽歿……）（二九）など、これも明らかに⑥以降の詩集であり、題目の「嬾齋」も⑥と重なつてゐるから、詩文集として取り上げた。

収載された中で有名なのは、陳垣が『清初僧諍記』巻二の「牧雲五論諍」で取り上げた巻六の「五論」であるが、拙稿「牧雲通門の『五論』をめぐつて——明末清初僧諍覚書（二）——」（『宗学研究』第三二号・一九九〇）で扱つてゐるので、そちらを参照されたい。

⑧ 『牧雲和尚四悉書』 十四卷 嗣法弟子 鄂州智時編次 西資果得授梓

松陵止止居士潘未校閱

題目の「四悉」は、仏の説法を四種類に分類した「四悉壇」（中村元『仏教語大辞典』五一―四頁参照）という語から取られたものと思われる。よつて「四悉書」とは、仏の全ての教えが具つた書物という意味であろう。⑦同様、北京図書館所蔵の孤本である。版式は②と⑥と類似しており、また半丁十行、毎行二十次であるが、版心の左側にその丁に載せられた文章の題目が記されており、また版心が別に枠で囲まれてゐるといふ異なつた形式である。編次した智時は③等に既出しており、授梓した果得は⑦を編次した禅僧である。校閲した潘未（一六四六―一七〇八）は、字を次耕といい、止止居士もしくは稼堂と号した。康熙十八年（一六七九）の博学鴻詞科に第二等第二名で合格、翰林院檢討の職を授かり、『明史』の纂修に携わ

って「食貨志」を撰述した人物である。仏教の居士として禅門との関係も深く、その著述に『遂初堂詩集』十六卷、『文集』二十卷、『別集』四卷などがある。その伝は『清史稿』卷四八四（中華書局校点本・p. 13343）などに見えぬ。

巻頭に止止居士潘耒撰の「牧雲禪師遺書叙」と鄂州嗣法弟子智時謹述の「四悉書結集原起」が付されており、潘耒の叙には「康熙三十五年丙子（一六九六）仲秋」の年次が記されている。刊記は無いが、少なくとも康熙三十五年以降の刊刻であることが知られる。

内容的には論説と書牘を集めた文集であり、詩偈は含まれていない。論のうち、「観苦入道論」は⑥に、「答友人世出世論」「式古要論十六則」「續五燈三難論」の三つは⑦にも収載されている（但し、「答友人世出世論」は⑥では「与友論出世書」という題目になっている）。その他はこの『四悉書』にしか見られないものである。

内容は次の通りである。

〔序〕

牧雲禪師遺書叙（康熙丙子仲秋止止居士潘耒撰）

四悉書結集原起（鄂州嗣法弟子智時述）

〔卷之一〕華嚴擇乳上

管記 世主妙嚴品第一一之五 如来現相品第二 普賢三昧品第三 世界成就品第四 華藏世界

品第五一之三

〔卷之二〕華嚴択乳中

管記 毘盧遮那品第六 如来名号品第七 四聖諦品第八

光明覺品第九 菩薩問明品第十 淨行品第十一 賢首品第十二 惣記一之二

〔卷之三〕華嚴捫乳下

管記二十一則 解經 信解 期悟 出義 曲表 正答 測聖 贅 偏化 割法 瞽經 執名
擬智 乱信 彰過 岐見 祛蔽 科弊 憫機 稽配 海喻本日斥似

〔卷之四〕華嚴捫乳之餘

六相義八喻 琴喻 車喻 奕喻 筆喻 山喻 水喻 界喻 空喻 管城子內傳

〔卷之五〕首楞嚴經尊王論上

序 觀疏論一 觀疏論二 三觀論 如來密因論 惣持論 第一義論 奢摩他論 妙奢摩他論
標本論（二篇） 常住真心論 三觀破立論 經題 科儀 三大師垂訓 無尽居士如是義

析微篇上

最初方便論 妙奢摩他論 二決定義論 根塵同源論 結心論 此迷無根論

〔卷之六〕首楞嚴經尊王論下

析微論下

妙奢摩他三摩禪那最初方便顯密論 最初方便原本論 最初方便奇正論 最初方便神話無局論
仏言詞深遠論 仏辯才縱奪論 仏善巧無方論 仏法大一統論 推簡法論

〔卷之七〕四經辯魔箋要

大涅槃經十則 大般若經九則 維摩詰所說經二則 瞿師羅經二則 法華勺海頌二十八首 法華後
頌十二首 大般若經綱要序

〔卷之八〕論

尊經遠邪論 禪教同源論 觀法界文 觀苦入道論 發菩提心論

〔卷之九〕論

答友人世出世論 式古要論十六則

〔卷之十〕論

天童中興臨濟四論〔乘願特起・殉法闢謬・法辯深広・師表具瞻〕

嗣統五論〔虎丘一子・先達知微・千燈併一・先宗遙企・法運不可知〕

〔卷之十一〕論

法門正諍論 高峯主人公論

〔卷之十二〕論

統五燈三難論 閱五燈嚴統誠門下語附 代黃檗判獨往徐居士妄評論

〔卷之十三〕書

与戒雷法師辯禪宗非謬書 答鶴林友人難前書 答戒雷法師重難前書

上錢侍郎牧齋論禪宗古尚書 与嚴髻珠書 復大梅法幢幟姪禪師書四則

〔卷之十四〕書

与李暎令秀才論行市禱雨書 答円聞法師論法門流弊書

定天童繼席書壬午冬前後八首

復天童勤旧議公卜住持書

止輪住之議推木陳和尚主天童書 与木陳和尚書 与石奇和尚書

又復石奇和尚書

又与石奇和尚推定木陳和尚主天童書 与南源師請公推木陳和尚主天童書

觀請木陳和尚主天童書

与木陳和尚論法門不妄付授書 復邵中英孝廉書 与木陳和尚論弘法宜遵先式書 又復木陳和尚
修海印道場書

この内、卷一一の「高峰主人公論」は明末清初期に大きな問題となった高峰悟道因縁に関する論文であり、また崇禎十五年冬に書かれた卷二四の「定天童継席書」は密雲円悟の遷化後に勃発した後継者争いに関わる書簡である。その他、「天童中興臨濟四論」「五燈三難論」や「与木陳和尚論訪問不妄付授書」といった題目を見ても分かるとおり、当時の禪門で繰り広げられていた僧諍に関わる文章が収載されている。その意味では、密雲円悟の『天童直説』や費隱通容の『費隱禪師別集』に似通った書物である。

以上八種類のうち、①⑦⑧以外は総て影印刊行されており、容易に見ることができる。①の『語録』についても駒澤大学図書館での閲覧や写真撮影が可能である。北京図書館に存する⑦⑧は原本の閲覧も容易ではなく、影印出版が待たれる。ただ、⑦⑧については、全冊の手写本が筆者の手元にある。書き写しの際の誤写等が存在する可能性もあるが、資料としての使用は十分可能である。

順治六年の進士である王庭（言遠・一六〇七〜一六九三）は、牧雲の著述について次の様に評している。

世間でのこの文集（『嬾斎別集』）を読んだものは、「あるいは」師（『牧雲』）を宗門の工職人だと思ひ、永明延寿の『宗鏡録』や、覚範慧洪の『禪林僧宝伝』や、『寒山詩』や石屋清珙の『山居詩』といった軌轍作品と並べ、「あるいは」師を文人だと思ひ、また陶淵明・王維・白居易・蘇東坡などの仲間人間に位置づけてゐる。

世有読斯集者、以師為宗工、將永明之録、覚範之伝、寒山・石屋之詩、軌轍相方。以師為文士、亦陶王白蘇之間、位置攸在。（『嬾斎別集』巻頭付録・序）

当時、牧雲の詩文が高く評価されていたことが窺われよう。

彼の詩文については、また稿を改めて論じたいが、『牧雲和尚四悉書』及び『牧雲嬾斎後集』に収載されている「式古要論」については、『花園大学国際禅学研究所論叢』第三号（二〇〇八年三月）に「禅門の語録はどうあるべきか——牧雲通門「式古要論」の主張——」という題目で全文を紹介しているので、そちらを参照されたい。